

『統高僧伝』の増広について

伊 吹 敦

一 問題の所在

『統高僧伝』は、中国仏教を研究する上で、最も重要な史料であるが、その成立には多くの問題が残されている。即ち、序が書かれた貞観十九年に一応完成した後も屢々増補されたことが確認できるし、また、同じく道宣撰の佚書、『後集統高僧伝』との関係も問題である。一方、現行の諸本を見て、既に、三十卷本（高麗本）、三十一卷本（福州版系）、四十卷本（明北藏系）の三種が知られ、また、序という僧伝の数も、三十卷本と三十一卷本とは異なっているのである。これを先の増広といかに關聯付けるかということも問題である。

このような事實は、次のような重大な問題を惹起する。即ち、『統高僧伝』の僧伝全てを道宣の撰述と認めてよいかという問題である。例えば、禅宗史研究の基礎史料とされる道信や牛頭法融の伝記は、古い三十卷本には見えないのである、このような伝記の信憑性を確保するためには、どうして

も、この本の増広過程の解明が必要となる。そのために、先ず、『後集統高僧伝』について論じたい。

二 『後集統高僧伝』について

『後集統高僧伝』は、『内典錄』や『法苑珠林』にその名が見えた後、『開元錄』以前に失われたが、そのことと『統高僧伝』の増広との関係が従来から云云されている。即ち、『後集統高僧伝』が『統高僧伝』に合糅されたことが伝を絶った理由ではないかというのである。この見方によれば、その合糅は、当然、唐代ということになる。しかしながら、私には、『後集統高僧伝』の『統高僧伝』への合糅の事實は認められるものの、それは唐代においてではなく、宋代において、三十卷本から三十一卷本に成長する過程でなされたと考ええる。というのは、この過程で増補された伝記の中心をなすのは、習禅篇六の全部と感通篇中の全部とであるが、前者の巻末には次のごとき註記があるからである。

『統高僧伝』の増広について（伊 吹）

「右大唐西明寺沙門道宣撰。見内典録。保唐寺藏經。」

この註記は、一見、甚だ不自然である。『統高僧伝』が道宣撰であることは、いまさら断るまでもない周知の事実だからである。しかし、この註記の付された位置を考慮に入れば、素直にこの意味を理解することが出来る。即ち、「右のこの部分は道宣の撰述である。そのことは、この部分を追補する際に基づいた本の名前が『内典録』に見えることによって確認できる。この本は、保唐寺の蔵書の中から見付かった。」という意味に解釈でき、これは、この部分を他書によって補った際に、増補者が増広の妥当性を強調するために付した註記だと考えられるのである。そこで、『大唐内典録』中の道宣の著作を調べてみると、巻第五には『注戒本』以下十八部、巻第十には『釈門懺悔儀』以下九部を載せるが、僧伝の類としては、『統高僧伝』と『後集統高僧伝』とを挙げうるに過ぎない。しかるに、この場合、補われる対象が『統高僧伝』なのであるから、この部分を補う際に資料となったものは、『後集統高僧伝』以外ではありえないのである。

このような註記が見られるのは、この部分だけであるが、三十一巻本に至って補われた部分は、全て新出の『後集統高僧伝』に基づくと考えてよいであろう。そして、このことによって、貞観十九年以後の僧補を既に含む高麗本に全く伝えられていなかった伝記が、多く『後集統高僧伝』に載せられ

ていたという事実が確認でき、唐以前における増広は『後集統高僧伝』と無関係であったことが推論できるのである。

宋代における三十一巻本の成立は、『後集統高僧伝』の発見と、その合縁によるものであるが、この際に発見されたものは、その断欠本であったようである。それは、この際に増補、改変された伝記が、所謂十科の内、実質的には、習禪、明律、護法、感通の四科に過ぎないこと、また、僧名のみで本伝の無い伝記を増補していること、不完全な道胄伝、曇逞伝を載せていること、分量的に十巻にはとても及ばないこと等から推定できる。従って、残された部分は、その極く一部に過ぎないのであるが、それでも、『後集統高僧伝』が、『統高僧伝』同様、漸次に成長を遂げたことが推測できる。というのは、感通篇中の伝記の配列を見るに、斉から始まって一旦唐に及ぶが、その後、隋に戻って唐に至るという配列を三度も繰り返しているのである。これは、恐らく、この巻が四層からなることを示すものであろう。

三 高麗本以前の形態について

『統高僧伝』の諸本のなかで、最古の形態を保つものは高麗本である。しかし、これとても貞観十九年の道宣脱稿時のものに比べれば懸かに増広されている。この大幅な増広の過程を詳しく辿ることは、現在ではもはや不可能であるが、種

高麗本に較べて、八乃至九の伝記を欠く異本とは、『一切経音義』及び『新集藏經音義隨函錄』が音釈の対象とした『統高僧伝』のことである（以下、随函録本と呼ぶ）。これらは、所謂の音義で、それらの書が撰述された当時の大藏經に含まれる諸経論の種々の難語について音釈を付したものである。従って、これら二書に音釈されている言葉を、一つ一つ現行の高麗本と対照することで、どの伝記がその当時存在したかを知ることができる。但し、この場合、証明できるのは単に存在したということのみで、音釈がないからといって、それが存在しなかったということではない。その伝記が存在しても、それに音釈すべき言葉が無かったということも考えうるからである。しかし、『随函録』には、それぞれの巻の正伝の数が明記されており、それと対照することで、その当時存在しなかった伝記をほとんど確定することができる。また他に、古い『統高僧伝』の形態を窺わせるものとして、『大藏經綱目提要録』がある。これは、大藏經中の経論の概要を示したもので、『統高僧伝』の説明において、各巻の僧名がかなりの数挙げられており、やはり、参考となる。

『続高僧伝』の増広について（伊吹）

高麗本	音義	隨函錄	提要録
凝塵 法僧普濟(普安志命覽曠)	○	×	○
普大智女法[亡名]	○	○	○
[會通]尼姉妹	○	○	○
[比丘書生]	○	○	○
[善導梨]	○	○	○
紹闡道休論	○	×	○

* ()で囲まれた僧伝は、附伝として目録に列名のあるもの、[]で囲まれた僧伝は、附伝としての列名はないが、便宜上補ったものである。

* ○は音釈の対象となった言葉が含まれることから、その伝記が存在したことが確認できることを示す。

高麗本	音義	隨函錄	指要錄
法凝		×	
僧崖	○	○	○
巴		○	○
普濟		○	○
(普濟)		○	
普安	○	○	○
志命	○	○	○
智覽	○	○	○
玄覽	○	○	○
法曠	○	○	○
[亡名]			
会通		○	○
[比丘尼姊妹]			
[一書生]			
[善導]			
紹闡梨		×	
道休	○	○	○
(論)	○	○	

* ()で囲まれた僧伝は、附伝として目録に列名のあるもの、[]で囲まれた僧伝は、附伝としての列名はないが、便宜上補ったものである。

* ○は音釈の対象となった言葉が含まれることから、その伝記が存在したことが確認できることを示す。

『統高僧伝』の増広について（伊 吹）

以上のような方法によって、高麗本に有りながら、随函録本に存在しなかったことが確認できるものとして、次の伝記を挙げることができる。

- 1、卷第二十一の靈藏、覚朗、慧説の三伝内の二伝
- 2、卷第二十五の慧簡伝
- 3、卷第二十七の法擬、紹闡梨の二伝
- 4、卷第二十八の法建、慧恭、法泰の三伝

その他、卷第十七の十一伝の内の一伝も無かった可能性があるが、これには問題が残されており、明確ではない。従って、随函録本は、高麗本に対して、八乃至九の伝記を欠いていたこととなる。ところで、この「九」という数が、高麗本の序文に書かれている僧伝の数「正伝三百四十」と、三十一卷本のそれ、「正伝三百三十一」との差に丁度合致するのは、これらの僧伝の増補と序文の書き換えとの間に何らかの関係が存することを窺わせるが、これ以上には論じえない。

ところで、『指要録』が言及する『統高僧伝』は、高麗本に対して二十一の伝記の列名を欠いており、これらは存在しなかった可能性が強い。しかも、それらと随函録本に欠く伝記との間には出入りが見られるのである。このことは、両者が系統を異にすることを示し、高麗本以前に二系統の異本が存在したことを窺わしめる。そして、これら出入りのある伝記については道宣撰述を認めることは困難である。

これら以前の形態については、それを窺わせる史料が少ないので、明確には論じえない。しかし、以下に掲げる理由から、数次に互る増広があったものと見る事ができる。

先ず、高麗本の卷第六の末尾の五伝は、宝淵、増詢、慧超、真玉、僧遷であるが、このうち、前の三つには巻頭の目錄に「本闕」と註記がある。これは、元来存在しなかったことを示すものに相違ない。更に注目すべきは、『統高僧伝』は一般に「釈某」という形ですぐに本伝を始めるが、最後の僧遷の伝記だけには、本伝の前に「後梁荊大僧正釈僧遷伝」なる標題を置いていることである。このような例は、他には卷第七の末尾に見られるのみである。これらは同種と見るべく、恐らく「本闕」と註記された伝記が増補された後に、ある時期に一度に増されたのであろう。つまり、ここには、少なくとも二度に互る増広の跡を認めることができるのである。他の巻では、以上のような形跡は留められていないが、これらと同時に相当数の伝記が増補されたものと推測できる。

なお、近年、高麗本以前の形態を保つ興聖寺本が発見されたが、未だ詳細は明らかでなく、今回は言及を差し控えた。

△キーワード▽ 統高僧伝、後集統高僧伝

（早稲田大学大学院）